



K230.83

15

3

三松堂編輯所編纂

應用女子作文書

東京 松邑三松堂

應用女子作文書 卷三 目次

第一學期

第一課 文の構成 一

宿題 記事文 四

第二課 書取 六

畧字

第三課 書翰文 一〇

照會文

宿題 書翰文 一二

第四課 文體の統一 一三

練習 一五

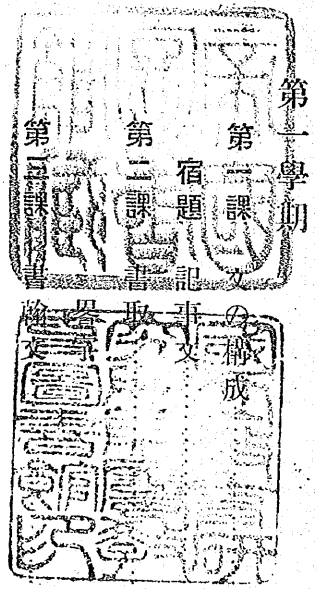
233-461

三松堂編輯所編纂

應用女子作文書

東京 松邑三松堂

應用女子作文書 卷三 目次



第一學期	宿題	照會文	一〇
第二課	書翰文		一六
第三課	文體の統一		四
第四課	練習		一五

應用女子作文書卷三 目次

44. 2. 4
内交

第五課	復文	一七
宿題	解説文	二〇
第六課	書取	二三
	漢字	
第七課	叙事文	二六
第二學期		
第一課	句の種類	二九
第二課	叙事文	三四
宿題	叙事文	三六
第三課	文の要素	四一
第四課	復文	四八
宿題	書翰文	五二

第五課	祝賀文	五四
	書取	
第六課	紀行文の要領	五八
	文例	五九
宿題	紀行文	六三
第七課	書取	六四
	漢字	
第八課	書翰文	六七
	弔慰文	
第三學期		
第一課	傳記文	七一

卷三目次終

文例	七三	
宿題	傳記文	七七
第二課	復文	七八
第三課	繪葉書文	八〇
	練習	八三
宿題	繪葉書文	八四
第四課	書取	八四
	假名	八八
第五課	記事文	八八
	短縮文	

應用女子作文書卷三

第一學期

第一課 文の構成

およそ、文を組立てんには四段の順序を経ざるべからず。

第一題に對して、此の文は如何に趣向を立て、作らんかと考ふるなり。これを着想といふ。

第二考へ得たる趣向に對して、材料を考へ集め、然る後、其の取るべきものを選びて、適當の順序に配り付くるなり。これを結構といふ。以上二つはいはゆる腹

案なり。

第三配り付けたる材料によりて、速に書き終るなり。

第四書き終りたる文を綿密に調べて訂正するなり。

右の順序は如何なる文にも、必ふむべきものにして、假令ば、櫻といふ題につきていはんに、第一これを如何なる趣向に作らんかと考へ、先づ風景をいひ、次に名所をいひ、次に櫻に關係ある逸話をいひて結ばんと假定す。かくて趣向立たば、風景には何をいふべきか、朝日に匂ふ眺めもあれば、夜櫻もあり、雨に逢ひては、蒼色つき、風に吹かれては雪と散る。又名所にては、吉野山の霞とまがふ一目千本もあり、嵐山の水中に花を宿すもあり。逸話につきては、義家の勿來關に駒を止めて、落花を詠ぜし事實もあれば、忠度が鎧の袖より

出し、古都花の歌もあり。かく趣向につきて、種々材料を考へ集めし上は、其の取るべきものを選んで適當に組合せ、これをその順序に従つて綴り、後、語句を訂正するが如し。

作文は家を建つるに全く同じ。家を建つるには、先づ、如何なる間取にせんかと圖取りをなす。圖面出來上れば、これに適當なる材料を選びて配置す。次に、愈々建築して、後、修飾を施すなり。然るに、文を作るに、何等の腹案もなくして、直に筆を執り、考へながら書き、書きながら詞を練るものあり。これ、恰も建築しつゝ、圖面を引き、未だ建て終らざるに、花瓶をすゑ、額を掛くるが如し、笑ふべきの至りならずや。さて、作文は常に前述の心得によるべきものなれば、十分な腹案立つまでは、決して筆を執るべからず。而して、一旦

筆を執りたれば、用字、用語を顧みず、一息に綴り、終りて大體の骨子とし、然る後、用語の穩ならぬ所はなきか、言ひまはしは如何に、文字の誤はなど、再三、再四精しく讀みて、一字一句もゆるかせにせず、嚴密に之を訂正し、己れの見る所にては、最早缺點なしと思ふに至りて、始めて清書するものと知るべし。

○宿題

春 曉

前課に於て示したる心得によりて文語體に作れ。

作例

花月の夜

戸を明くれば、十六日の月櫻の梢にあり。空色淡くして碧霞み、白雲團々、月に近きは銀の如く光り、遠きは綿の如く和かなり。春星影よりも微かに空を綴る。微く、茫たる月色花に映じて、密なる枝は月を鎖してほの闇に、疎なる一枝は月にさし出でてほの白く、風情言ひ盡くし難し。薄き影と薄き光とは、落花點々たる庭に落ちて、地を歩する、さながら天を歩する感あり。濱の方を望めば、砂洲茫々として白し。何處やらに俚歌を唱ふ聲あり。已にして雨はらくと降り來ぬ。やがてまた止みぬ。春雲月を籠めて夜はの白く、櫻花澹として無からんとす。蛙の聲いと静なり。(徳富盛花)

應用文題

一 花時雨

二 小園の胡蝶

三 彼岸

四 臘夜の笛

五 雨中の花

六 雛祭

七 地理理科若くは家事科にて學びたる事

六

第二課 書取

教場筆記、演說筆記、其の他、速寫を要する時には、到底、正當なる文字を書く暇なし。故に、かねて畧字を心得おくべき必要あり。されど、畧字には一定のきまりもなく、又、各字、必畧すべきにもあらず。只或字に限り、慣用上、世間に通じたるものなり。

左の文中の文字を記憶すると同時に、畧字にも注意し、命に従ひて書取るべし。

一 八月中旬、敵艦隊主力ノ旅順ヨリ浦塩ニ逃レントスルニ及ビテ、黄海及ビ蔚山沖ノ海戦ヲ見ルニ至リ、期セバシテ全ク敵ノ戰略的企圖ヲ摧破シ、我が作戰目的ノ過半ヲ達成スルヲ得タリ。其後、陸戰漸ク歩武ヲ進メ、旅順ノ背面ニ對スル我が攻圍軍不撓ノ迫撃ハ、海上ニ於ケル耐久ノ封鎖ト相須ツテ、遂ニ敵艦隊ノ主力ヲ要塞ノ下ニ殲滅スルニ到レリ。惟フニ、此ノ期ノ作戰ハ、戰勢ノ自然ニ伴ヒテ、漸進微功ヲ積ミ、攻戰約十ヶ月ニ亘リ、我が將卒ノ心力ヲ傾注シ、智勇ヲ發揮シタルコト、本戰役中ニ冠絶シ、忠死ノ士、殉難ノ艦、亦少ナカラザリシ

ト虽モ戰局ノ大勢ハ、茲ニ初メテ定リ、尔後日本海ニ於ケル決勝ノ機運モ、此間ニ萌芽シタルヲ覺ユ。

二 昏齋はなるべく清潔にし、且戸肅に保つことが肝要であります。固より書齋は朝に夕に或は書き、或は読むことをする処でありますから、書冊、筆墨の類の縦横散乱することを免れないのであります。しかしながら成るべく、筆墨、書冊等、悉、その處を得てよく整頓し、勉めて乱雑を誡めねばなりません。吾々の頭腦の中には、いろいろの觀念が往來するものであります。それが、少しく吾々の頭腦を嚴正に保たうといふならば、一切嫉妬、猜疑、憎惡、憤悲、その他、不善の觀念を一掃し、純潔にして、些の汚点を著けぬやう

にせねばなりません。肉体は他の動物と全じく、不淨を免れないにしても、少くも、たゞこの頭腦を以つて、寸毫も不淨に穢されず、徹頭徹尾、嚴正なる狀態を存するといふことは、徳性を涵養する者の、才一に力むべき所であります。

左の語句中の字を出來得る限り畧字に改めよ。

一 國民の義務を辨ふべし。

二 學を勵み藝を習ふ。

三 彈藥は盡くれども、氣力は衰へず。

四 鳶は天に飛び、魚は淵に躍る。

五 鴈は春歸りて、秋來る。

六 歴史を讀みて、故事を知る。

七 桑田變じて海となる。

八 水流れて晝夜の區別なし。

九 曉夢覺めて鳥聲を聴く。

一〇 獨數葉の畫帖を携へて、沼澤の邊に遊ぶ。

第三課 書翰文

照會文

何事によらず人に照會する文は、其の問合すべき事柄を明瞭に記載し、一讀して要點の知らるゝ様なさゝるべからず。故に、親戚、知人等は格別、大抵ならば、簡單なる挨拶位にして、餘事は成るべく認めざるをよしとす。且、照會に關する文

も、一種の依頼文なれば、言辭を丁寧にするべきこと勿論なり。照會に對する返事は、十分に問合せし範圍を會得して、少しも事柄を漏さざるやうにするは、いふまでもなく、他に之に關係して氣附きたる事あらば、附け加ふべし。書中の言辭は、たとひ、知らざる人なりとも、毫も尊大なる風なく、鄭重に回答するは、大に與ゆかしきものなり。

作例

住所の問合せ

平素は御無沙汰にうち過ぎ、誠に失禮いたし居り候。さて、御入營中の御兄上様には、其の後、相變らず御無事にいらせられ候や伺上候。いつぞや、御入營中、最嬉しく樂しき事は、知人よりの手紙なるよし承り、私よりも

一度ゆるく面白き事ども御知らせ申上度、日頃存じ居候へども、居らせらるゝ隊の名承知いたさず、ついとい今日まで延引に相成居候次第ゆゑ、御序の節一寸御知らせ下され度、御願ひ申上候。かしこ。

文題

- 一 在宅の有無を問合す
- 二 汽船出帆の問合せ
- 三 雜誌發行所の問合せ
- 四 直段の問合せ
- 五 桑葉の所望

○宿題

前週課題の返事

文語體にて作り、書翰の通りに認めて出だすべし。

第四課 文體の統一

口語にも文語にも、それと定りたる法則あれば、この兩體を一文の中に混用すべからざることは、已に前課に於て説きたるが、其の文語體中にも、亦數種の書き振れば、これが混同を避けざるべからず。

そも、我が國の文體は、古來種々變遷して、今日に至りたるものにして、古き書きぶりと、今の書きぶりと、又、別に漢文口調のものとありて、各異り。次の例を見よ。

さしたる事なくて、人のがり行くは、よからぬことなり。

用ありて行きたりとも、其の事はてなばとく歸るべし。
久しくゐたるいとむつかし。(古文體)

さしたる事なくして、人を訪ふはよからぬことなり。
用ありて行きたりとも、其の事終らばとく歸るべし。
久しく居るは誠にうるさきものなり。(今文體)

故なくして人を訪ふは、よきことにあらず。用ありて
行くとも、其の事辨ずれば速に去れ。談長ければ以て
厭ふべし。(後文體)

右の文例を見れば、其の體の自ら異なる所を知るならん。而して我等が今日文を學ぶに標準とすべきは、今文體なること勿論なれども、他の二文體も、猶世に行はるゝのみならず、讀本中の文章には、是等の諸體を雜へ集められれば、講讀の結果、

知らずゝの間に記憶して、作文の際、往々、一文中に、或は古文體の所もあれば、漢文體もまじりて、誠に見苦しきことあり。かゝる書きぶりは、俗にいはゆる木に竹をつぎたる如きものにて、其の文の着想、結構等は、いかに面白きも、これがため大半の妙味をそがるべし。されば、作文の際はよく語句を選びて、必、一様の文體にておしとほし、種々なる書きぶりのまじらざるやう注意すること肝要なり。

練習

左の文を今文體に直せ。

一屏風、障子などの、繪も文字も、かたくなゝる筆様して、書きたるが見にくきよりも、宿のあるじのつたなく覺ゆるなり。大かた持てる調度にて、心おとりせらるゝ

ことはありぬべし。

二父母は我れを生み、國家は我れを衛る。故に親に事へては孝なるべし。君に事へては忠なるべし。古來、豪傑、一も忠孝の人にあらざるなし。故に能く其の熱誠を以て偉大の業をなし、名、千古に垂る。

左の文中、文體の一致せざる語句を訂せ。

年若き少女は花の如くなるべし。色麗しく匂ひやかなるこそよけれ。例へば、打ち向かふ人の、覺えずかたほ笑みて、しばしは、心の憂鬱を散ずる如くならんを欲す。節くれたる深山木の、見るからに疎ましく、妻ましげなるやうにはあるべからず。然りと雖、此の花は、しめ結はれたる垣の中の花なるぞよき。決して路傍の花の如くにな

ありそ。日常の動作言語すべて、恭謙の徳溢るゝやうなる中に、又、一種犯すべからざるさまあるを要す。これは、やんごとなききはの婦人に、しかあるべしといふのみならず、たとひ、身は下さまに生れたる者なりとも、氣品の高き、豈、貴女に讓るべけんや。

第五課 復文

次なる文を、文體の統一に注意して文語體になせ。

螢の話

螢の壯觀は、昔から人の目をひいて、凡そ文字ある程にまで開けて居る國民は、いづれも、この螢の事を、何か多少留

めて居り、それらを讀むと、昔から世界の國々の人が、この螢をいかに觀て居つたかといふことが、窺はれるのであります。

さて、螢といふと、直に火といふ考が起ります。現に「ほたる」といふ言葉は、火垂、或は火照といふ意から出たのであるとも傳へられ、夜光照夜燃燐、宵燭挾火、自照などの異名が、支那の文人の間に用ひられて居ます。その他、いづれの國の言語でも、螢といふ名は、皆、火といふことに縁があるのであります。實に、この火があるための螢で、この火といふものがなかつたら、恐くは、螢といふものは、殆ど人々の意に掛けられなかつたでありませう。その證據には、螢科に屬する昆蟲類で、われらの知つてゐる螢に、よく似

た蟲が澤山居ますが、火を出すことが出来ぬために、動物學者以外の人には、殆ど知られて居ませぬ。又、螢のある種類では、雌の螢はよく光を出すことが出来ても、雄にはその光を出す器械がないために、雌だけはよく人に知られ、詩人に賞せられて居るのに、雄は一向世に知られて居らぬといふことが、少くないのであります。

それで、この螢を、春の櫻、秋の紅葉などと同じく、一種の景物として、昔から特に、東洋の人々が、賞翫して居ることは、代々の詩歌、文章に出てゐて、いふまでもない事でありますが、それではなくて、螢の火を燈火の代りに用ひたといふ事は、かの支那で、晋の車胤といふ人の故事ばかりでなく、わが日本を始め、西洋の國々にも、かういふ例がいくら

もあるのです。あります。(波瀾庄三郎氏の文節略)

二〇

○宿題

朋
友

左の着想に基きて文語體に作れ

一人には朋友の必要なることを、種々の方面より説く。

二朋友は、必、善良なる人を選ぶべき理由を説く。

三益友、又は損友の例を擧ぐ。

四朋友には信義を以て交るべき理由を説く。

作例

習
慣

人は幼少より善き習慣に長せんことを要す。蓋、少年の中に習慣となれることは、終身永續して變ぜざればなり。たとへば、木の皮に文字を刻むが如し。その木の長ずるに随ひ、文字も大になるなり。兒童の時、その後來行くべき道の中に入れて教育すべし。然らば、年長大なるに及びても、その道を離れて背くやうのことなかるべし。ロルド、コリシワードは、その愛する少年を誡めて曰はく、汝、未、二十五歳に至らざる前に、終身の品行を立つべきを要す。といへり。習慣は人の長ずるに随ひ、勢力を長じ、これより品行を生ぜしむることなれば、既に習慣つきて、品行となれるものを、長大の後新に、別路に轉ずるは、甚、難きことなり。

三
およそ、人既に知りたる事を忘れんと欲するは、いまだ知らざる事を學ぶより、實にかなし。昔、新リシヤは善く笛を吹く人ありき。その弟子の、以前拙き師より學びしものには、常に倍する、修金を出ださしめたりとなり。誠に習慣を除き去ることは、齒を抜くよりも、苦痛甚しきことなり。試に懶惰にならへる人、妄に金錢を費す人、或は酒を嗜みて癖を成したる人を教訓して、その行を改めしめんとすとも、能く改め得べきもの、十に一二もあらざるべし。蓋、これらの習慣、久しく既に深き疵となり、體中の全部を成したれば、これを除き去ること能はざるなり。されば、リシヤの言に、善き習慣を形づくらんと、謹みて心を用ふる習慣こ

そ、最、明哲なる習慣なるべけれ」といへり。(中村正直氏の文節略)

應用文題

一 眞の勇氣

二 國藝の樂

三 交際の道

四 我が國の產物

五 水浴

六 分業

七 修身理科家事科にて學びたる事項

第六課 書取

左の文中の文字を記憶して、命のまゝに書取れ。

一 合名會社とは、數名の人が共同し、同一の商號を使用して、業務を営むものにして、社員は、いづれも、會社の業務を執行すべき權利義務を有するものなり。但し、定款

の規定により、業務執行の社員を定むることを得べし。各社員は、會社の負債に對しては連帶無限の責任を有するものなり。即、會社の負債は、會社の財産をもつて、これが辨償に充つるは勿論、若し不足する時は、各社員の財産を擧げて、これが辨償の責に任すべきものなり。

二電話は、日露戰爭に大なる効力を示せり。元は、總司令部より、指揮を諸隊に傳へ、或は諸隊の報告を受くるに、傳騎の往復、櫛の齒をひくが如く、其の混雜一方ならず、而も傳騎の中途に斃れ、或は機に後るゝ者多くして、不便甚しかりき。日露戰爭に於ては、我が滿洲軍司令部は、全軍の指揮に、最、便利なる一地點を占め、各方面に電話線を引くこと、恰も首腦より神經の分布するが如く、

指揮官は、各方面の報告を參考して、諸隊の部署、號令を下すに、戰線數十里の間、さながら、手指を使ふが如く、觀戰の外國武官、皆其の靜肅にして敏活なるに驚きき。

左の語句中、用法を誤れる漢字を訂せ。

一辨論終決する時判者立ちて批判す。

二徳川時代には、女流にして俳偕を好くせしもの少からず。

三朝顔に鈎瓶執られてもらひ水。

四精心一たび至らば、何事か爲らざらん。

五富士山高く天半に掛り、浮島が原弘く横たはる。

六社、會に勇勝劣敗の例あるは數ふるに暇あらず。

七學生の幣風は速に矯正せざるべからず。

八英雄の古績を見て無限の感慨を興こす。

九國家の利害盛衰を省るべし。

一〇適度に運動すれば、血脈の順環をよくす。

第七課 敘事文

文題

散歩

作例にならひて、各自、近き頃散歩せし時の事を作れ。

作例

川づたひ

文かきくたびれて散歩せんと思ひなりぬ。大日に近

し、遠くまではとて、關口を川づたひす。此程、落花尋ねんとて來しをりには、水の面に四五寸ばかり生ひ出でつる若蘆も、心地よく並み茂りて、風を我がものがほなり。堤の薄掘り歸りて、庭になど思ひしは昔にて、今は身をも隠しつべし。小田の苗代のびそろひて、五月雨まつらんと思ふも樂し。小供に大人もまじりて、竿もて遊ぶもあり。何をか釣るらん。早くも汀したしき頃とはなりぬるかな。細き流れにそひて歸るに、子供のあれとりてといふを見れば、卵の花なり。これも樂し。かれも樂し。(天和田建樹)

應用文題

一 納涼の一夕

二 綠陰の讀書

三瀧の細路

五逆を觀る

四螢狩

六夕食の手傳ひ

第二學期

第一課 句の種類

文法には、文を性質上より、敘述、命令、疑問、希望、感歎等の目に分ちて研究すれども、今我々の學習する文は、かゝる單一なるものにあらずして、全文中には、敘述の所あり、疑問の所あり、命令、感歎の所等ありて、文法上に區別する所は、實にその一部分に過ぎざれば、こゝには、それらを句として論ずるなり。さて、文は多くの句の互に連續して、成立つものなれば、仔細にこれを研究して、此の句より彼の句に移り、又は、一の句を他の句に變ずる等、自在に活用する語法を練習するこ

と、頗る必要なり。今こゝに、句の種類とその例とを示すべし。

敘述句

敘述句は、文中、最普通にして、しかも大部分を占むる形なり。此の句は、只事實を述ぶるのみなるが、其の中にも、或は指定に、或は打消に、或は推量、過去、未來になど種々の表はし方ありて、其の用法最廣し。左の例を見よ。

日本人は勇氣を以てまされる國民なり。(指し)
 京都と奥州との間の飛脚便は、一年數回に過ぎず。(行遣)
 つゆばかりも汚辱を受けざりき。(行遣、過去)
 今年もなかは過ぎにけり。(過去)
 陸に上り給はんとならば、われ道しるべせん。(未來)

洗ひ髪などにて涼まば如何にとの心なるべし。(推量)

壯觀に驚きしもの、獨余のみにあらざるべし。(行遣、推量)

字を書くことを教へしめらる。(愛せ)

心安く夢穩かならしむ。(使役)

命令句

命令句は、他に要求する意を表はす句にして、正面より命令するものと、裏面より禁止するものとの二様あり。左の例を見よ。

其の變遷の甚しきを見るべし。

どうしても射て見せよ。(口語)

遠からんものは音に聞け、近からんものは目にも見よ。

裏面より
禁止する
もの

正直で成功するには、心の底から正直でなくては
なりません。(口語)

朝寝すべからず、長座すべからず。

あるじなしとて春を忘れそ。

疑問句

疑問句は、事を疑ひ、又は問をかくる意を表はす句をいふ。
次の例を見よ。

刀、脇差腰にせん事、誠に不用のことにや。

和尚様にも御縁御座候か。

螢は随分廣く燈火の代用を務めたものではあります

まいか。(口語)

又、疑問句とよく似たるものにして、實際の意義は疑問に

あらず、むしろ、叙述の意を強くしたる反動の句あり。形、
相似たるを以て、便宜上こゝに例を示す。

花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。

悲しき音を耳かしましきまできゝて、己が樂しみとす

るは、心ありといはんや。

あの夜更に誰か起き居るものゝ候べき。

希望句は、希望する意をあらはす句なり。次の例を見よ。

世の中にさらぬ別れのなくもがな。

雲に聳えし色香の、清く氣高くこそあらまほしけれ。

勝手ばたらきや、所帯持ちの仕事をなさる所は、私共の

手本にしたい。(口語)

第二課 叙事文

文を綴るに先だちて左の例にならひ、次なる句を各種類の句に作れ。

美名を永く後世に傳ふ。

美名を永く後世に傳へよ。(命令句)

例 よく美名を永く後世に傳ふるか。(疑問句)

美名を永く後世に傳へなん。(希望句)

あゝ美名を永く後世に傳へたるかな。(感嘆句)

一成功の運に遇ひしにや。

二心あらん人に見せばや。

三いかにも師を擇びて學ばしめらるべし。

四あゝ、定めなき人の世や。

左に集めたる句を、適當に連ね合せて一文とせよ。

風俗の變遷

すべて、男女の衣服、昔は極めて質素なり。男子も女子も十四五歳までは長き袖を着く。丈は鯨尺の一尺七八寸を極とす。貞享の頃より二尺ばかりになる。それよりやう／＼長くなる。近き頃は二尺四五寸になる。婦女の帶も、貞享・元祿の頃より漸く廣くなる。今は鯨尺にて八九寸に及ぶ。綿を心として襦の如くす。男の肩衣といふは、昔は麻の幅鯨尺の八寸ばかりなり。貞享・元祿の頃より幅一尺に及ぶ。寛永の頃までは、婦女は細き麻繩

にて髪を束ぬ。その上を黒き絹にて巻く。その後麻繩をやむ。越前の國より粉紙とて、元結紙といふ物を造り出だす。海内の婦女皆これを用ふ。それより絹にて巻くこともやむ。わが父まさしくこれを見て語りきかす。今の人聞きては眞とせず。凡そ男女の髪かたち、我等が見及びてよりこのかたも、幾かはりかしつ。今は昔の形も残らず。昔の婦人は髪多く長きをたけに餘るなどいひてほむ。近き頃は髪の少く短きをよしとする風俗になる。髪多き女は髪の内もを或は切り或は剃りてすくなくす。この風俗は京の婦女より移り來たる。病語に據る

○宿題

豪將琵琶に泣く

次なる談によりて文體語に作れ。

一 佐野の城主、天徳寺了伯といふ人は、北條氏に仕へてゐた勇將である。
二 或時琵琶法師を招いて、平家物語二曲を語らしたが、一曲は佐々木四郎高綱が宇治川先陣の事、一曲は那須與一宗高が扇の的の事であった。

三 了伯はこれを聽いて、一曲毎に涙を流して頻に泣いた。

四 後日、了伯は家來の者共を呼んで、先日の琵琶はどうであつたかと問うた。

五 家來共は、大層面白うございました。しかし、君には其の時非常に泣き遊ばしたが、如何なる譯でございますかと尋ねた。

六 了伯はその詞を聞いて、さて、その一言で力を落した。先づよく思つて見よ。佐々木が頼朝公に暇乞ひの時、大切な愛馬をもらつて

宇治川の先陣を約束したが、其の時は必ず打死して、再歸る考はなかつたのであらう。又那須與一が多くのの中から選ばれて扇を射る時、源平兩軍は鳴りをしづめて見てゐる。若し、射損じようものなら、生きては居られぬ。是も、必切腹する考であつたのであらう。戰場に臨んでは、高綱、宗高の心でなくてはならぬ。武士の道ほど哀れなものはない。今兩人の心を察して見ると、泣かずには居られない。思ふに、汝等の武は只、一旦の勇氣にまかせて、眞實から出るのではないと見える。それでは誠に頼もしくないとつた。

七家來共はそれを聞いて、何とも返す詞がなかつたといふ。

作例

おかぢの局

東照公ある時、本多、大久保などの人々を御前に召し、焚火をあそばして、今昔の合戦の物語、かたり合はせたま

ふ序に、「およそ、食物の中にて旨きものといふは何ならん。各申して見候へ。」と仰せらる。人々、おのがじし嗜むもの、事いひ出でて一決せず。その時、おかぢの局御側にて茶を煎じて、人々に差めながら、各み顔して聞きゐたるを御覽じ、「かぢは何を知りて笑ふか。若し思ひ寄りつる事あらばいひて見よ。」とのたまふ。人々も上意なり。局が論承らん。「とそゝのかせば、局さば申して見待らん。およそ、物の旨きものは、鹽に超したるはあらじ。いかほどよき調理なりとも、鹽なくば味調はざるべく、また一日も鹽なくば、萬民口腹を養ふこと能はざるべし。」といへば、諸人いづれも手を拍ちて驚歎し、いかさまと感じあへり。「さらば、天下に盡

づきものは何ならん。」と宣へば、こたびは、人々、口を開くまでもなし。」とて局に譲るに、局また申すやう、まづきものは鹽に過ぎたるは候ふまじ。いかばかり旨きものも、鹽味過ぐれば、本味を失ひて食ふに堪へず。」と申せば、御前をはじめ、伺候の人々、いづれも、局の聰明を感じ、これ、男子ならば、一方の大將承りて、大軍をも驅使すべきに、惜しき事かな。」とさゝやきけり。(徳川實記附録)

應用文題

- 一 仁徳帝の仁慈
- 二 清麿の忠節
- 三元就子を誡む
- 四 楠母の教訓
- 五千代の時鳥
- 六 自ら知れる佳話
- 七 修身歴史科にて學びたること

第三課 文の要素

およそ、文として備ふべき要素に、明晰、適健、優麗の三件あり。」明晰とは、文意一貫して、其の記述する所の事實、一讀の下、明に知らるゝをいふ。是れ文の生命ともいふべき必要なる條件にして、若、此の明晰を缺く時は、文としての價值更になかるべし。されば、文には第一に達意を貴ぶ所以なり。適健とは、文に勢力ありて生き／＼したることなり。これは、明晰に亞げる要素にして、これがため、讀者に惰氣を催さしめず、深く文意のある所に感動を起こさしむるなり。優麗とは、語句の流暢なるをいふ。これは、文をして枯燥に陥らしめず、讀むに隨つて興味を深くし、感情をひくことも

亦強からしむ。いはゆる讀み終るもなほ餘韻あるを覺ゆといふは、これがためなり。

右の如く、文には必三要素を備ふべきものなれども、その中、最大切なるは明晰にして、他の二要素はこれに亞ぐものなれば、文勢の適健ならんを欲して、明晰ならざる所を生じ、或は優麗なるを求めんとして、明晰と適健とを顧みざるが如きは、誠めざるべからず。

文例

讀書の時

若き時は、書を讀むに三つのよきことあり。氣強くして、書を多く讀みても疲れず。是れ一つなり。暇多く妨げなくて、書を多く讀み易し。是れ二つなり。年若

く氣盛んなれば、記憶強くして覺え易し。是れ三つなり。此の三つの事、書を讀むによし。又、年たけて後書を讀むに惡しき事三つあり。一つは、既に君につかうまつりて、司る所あり。人の交繁くなり、家の事又多くして、書を讀むに暇なし。二つには、年やうやくたけぬれば、氣弱くなりて、勉めて書を讀むこと難し。三つには、三十より後は、年々に記憶よわくなりてもゆけば、少年の時、一たび讀みて覺ゆる程の事を、年たけぬれば、十たび讀みても覺えず。是れを以て、幼く若き時に、早く書を讀むべし。もろくの藝は、年たけても習ひ易し。只、書を讀むことは、年たけては記憶よわく、氣力少く、暇すくなし。此の故に、幼き時より、まづ、藝などのことわ

ざは、おろそかにしても、専、勉めて書を讀み習ふべし。
是れ一生の寶となるなり。（貞原益軒）

右は特に明晰なる文なり。

奉天の大會戰

時は二月の末つかた、滿洲内地のことなれば、朔雲繽紛として山河を埋め、烈風肌を刺し、指を墮さんとすれど、我が軍は戰已に熟しぬとて、左右翼より大活動を起こしたり。其手始めは、最右翼なる川村軍の、清河城攻撃なり。そもく、清河城といふは、敵の左翼の策源地なる撫順の前面を擁護する要害にして、地形何となく旅順に似たる故、之れを小旅順と呼び、又要塞の形によりて、鉢卷山と稱へたり。二月二十三日、我兵万苦を犯し

て、河を渡り山を越え、無二無三に鉢卷山に突撃せり。敵は築城防禦には、世界無雙の露兵なれば、防戰の用意等閑ならず、機關砲を雨霰とあびせかけ、屢我が軍を腦ましたれど、旅順の要塞戰に經驗を積みたる澤村工兵特務曹長等、手に手に爆裂藥を持ちて防禦物を破壊し、忽ち一條の通路を開きければ、得たりと突撃部隊は、一齊に亂入して、驚き躁ぐ敵兵を縦横無盡に突き立て斬り立て、廿四日全く此の地を占領し、直に追撃に移りて、撫順方面を壓迫せり。（新保路次氏の文節略）

右は特に適健なる文なり。

我が家の富

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰れかいふ狭くして、

且陋なりと。家陋なりと雖、膝を容るべく、庭狭しと雖、仰いで碧空を望むべく、歩して永遠を思ふに足る。神の月日は此處にも照れば、四季も來たり見舞ひ、風雨、雪霰、かはるゝ到りて興淺からず。蝶兒來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜に觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて木に滿つ。風ある日には、青々と霞める空より、白き花ちらちらと舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。隣家に花樹多し。風に隨ひて飛花吾が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るが中に滿庭花の衣を著く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花

あり、李の花あり。

つく／＼ほふしの聲に、世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃え出で、たゞ一株、前の家主の植ゑ残したる黄菊も咲き出づ。名苑の花美しといふも、秋のあはれ閑寂の趣は却つてわが庭の一枚にあるべし。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして、滿樹金よりも黄なり。風の風起これば、其の葉翻々として翻り落つ。半夜夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も庇も手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人はいふなる錦を、われは庭に敷きつめぬ。木の葉落ち盡

くしては、流石に淋しげなるも、日影月影いよく多くなりて、空を見、星を見るに障り少なきは嬉し。(自然と人生簡略)
右は特に優麗なる文なり。

第四課 復文

口語體の文を文語體に、文語體の文を口語體に改むるが復文なること、已に一學年に於て述べたれども、古文體、漢文體の文、若しくは韻文を、今文體又は口語體に改むるも、一種の復文なり。

さて、如何なる文體にても、これを改めんとするには、原文の特長を變じて、或は長く、或は短く、或は前にし、或は後にし、語を添ふるあり、句を削るありて、種々に語法語脉を改め、以て

せんとする文體の特長を適當に表さざるべからず。

左の文に句讀點を施して後、平易なる今文體に改めよ。

禁庭の野分

朝露のひるまはさしもなかりし空の暮すぐる頃よりかきくらし夕日の光も見えずとかくするほどに雨いたく降り出でてほとり近く語りあふ人の聲さへ聞きわかぬばかりになりぬ闇に入りにし頃まではなほ雨の音のみ聞えしを夜深くなるまゝに雷さへ鳴りはためきて手枕の夢うつゝとも思ひ定めぬるひまなく稻妻のきらめきわたるいとすさまじ曉がたには雨はやみて風は烈しう吹き出でてつゝ宮の内もゆるぐばかりなるにいとど目もあはず。(皇后陛下御作)

左の文を特に敬語に注意して口語體に直せ。

皇后陛下には、文學の御たしなみ深くわたらせ給ひ、折にふれさせられての御歌など、誠にめでたくうるはしくして、斯道の博士たちも、常に驚歎し奉る所なりと承る。ことにかしこしと見奉るは、陛下にはよろづ御心を用ひさせ給ふこと深く、内外の臣僚に對せさせ給ひての御もてなし、常に御うるはしくわたらせられ、御内助の御續に至りては、また、奉るべき感歎の言葉も、なきほどなりとの御事になむある。

左の文を文語體になせ。

理學者のニュートンは、むづかしい問題を解きにかゝると、諸事夢中になつて、考へ込むのがきまりであつた。あ

る時、ニュートンは朝早く起きて、例の如く、誰も來ぬやうにといつて、書齋に閉ぢこもつて、餘程むづかしい調べ物に取り掛つた。家内の人々は、多分朝飯を食へには、出て來るであらうと、待つて居たが、なか／＼顔を見せない。主人に斷食をさせては濟まぬし、第一、身體のためにもよくないといふ評議で、下女に、鶏卵一つと、水を入れた汁鍋を持つて、書齋へ往つて、鶏卵を煮て給仕をさせた。すると、ニュートンは、自分で煮るから宜しい。早くあちらへ往きな。」

かういはれて、下女は手持なく、鶏卵を机の上の時計の傍に置いて、「三分間お煮になるのです。」といつて、立ち去つたが、若しや、又例のやうに、何事も忘れて居はせぬかと思

つて、そつと來て見ると、下女殿の心配空しからず、ニユリトンは眞黒になつて考へ込みながら、じつと鶏卵をつかみ、その代りに、時計を汁鍋の中へ打ち込んで、ゴトゴトゴトゴト。

○宿題

開店を祝ふ

左の心得を熟讀して文語體に作れ。

祝賀に關する文は諸事丁寧懇切に、衷心より祝賀する情をあらはして、先方に満足を與ふべきものなれば、古來より習慣となれる、不吉の文字を用ふることなどを避けて、かりにも感情を害せざるやうにすべし。例へば、結婚を賀する文には、去る歸るなどの語を思むが如く、何のいは

れもなき事ながら、多年慣例となれることを、さかしらに、獨破るは、何事にもよきことにあらず。又、かゝる祝賀の書翰は墨濃く麗はしく認むるものなり。

作例

新築を賀す

春の末つ方よりものし給へる御宅、此頃いよく御落成のやう承り、喜ばしう祝ひまゐらせ候。御住居のあたり、殊に景色すぐれたれば、春秋の花紅葉、月の眺もさぞかしと、御うらやましく存じ候。いづれ春にも相なり候はゞ、まかり出て、御作りの模様など拜見致したく存じ居り候。誠に御はづかしながら、利休好みの煙草盆一對、御笑草までに御目にかけて候。納め給はゞ嬉し

うこそ。めでたく かしく。

應用文題

- 一人の誕辰を祝ふ
- 二長壽を祝ふ
- 三就職を賀す
- 四病氣全快を祝ふ
- 五婚禮を祝ふ
- 六歸朝せる人の許に

第五課 書取

左の文を特に假名に注意して記憶し、命のまゝに書取るべし。

一かねて期しつる事ながら、きのふまで綾羅錦繡を纏ひし身を、あらたへ衣に著かへしのみか、水汲み薪樵るわ

ざも、助くるは只一人の老僕のみ。山風寒きはにふの小屋に、良人に事へ、子をはぐくみ、炊き濯ぎに日を暮らしつ。夜は熒たる孤燈の下に、麻紡み絲繰りてふかすも多く、よその見る目は厭はしけれど、更に厭はしげなる景色もなく、まめまめしくいたづき勤めて、ひたすら良人を慰めけるが、おひさき永き稚兒たちの、しづが子等と遊びつれて、餘念なげなる様を見ては、さすがに優しき母心の、あはれ、ゆるしよある武士の兒と生れながら、一生を花さかぬ埋木となしおほして、賤山がつらとひとしなみに、朽ち果てさせむことの、いかにも哀しききはみにこそ。」と、人知れず歎かれて、竊に手おり布子の窄き袂を、うるほしけむも幾度ぞ。

二天のいきどほりか地の怒か、朝のほどより風あらび、雨くるひて、物すごければ、雨戸さしかためて、早うしづまれかしと念ずるに、わりなくつよりきて、かはらは飛び、まがきはたふれ、樹どもは根こじにせらるゝなど、おどろくしう、先頃うゑつる萩の上も、いとおぼつかなけれど、せんかたなければ、燈火のもとにひいて、すこしなごむをまつほどに、とかく、おもひつゞけることゝもあり。おのれのいましめにもとおもへば、かたへなるものに書きつく。

次の語句中なる假名の誤を訂せ。

- 一 いえがこわれたら、大工をやとふてつくるわす。
- 二 そらとみずとの薇薔色が少しうつろう。

三 いかにも微かなにわとりのこへが聞へた。

四 筆のいきをい、ことに見へて、古の繪におさくはじず。

五 稲の實の頃は田のをもかわきて水なし。

六 森のこずえ、塔の九輪など見へたる、更にをもじろし。

七「言わず。言わず。」と、すまいたもふを、しいて、といまひらす。

八 雪にてりさふ月影をなどすさまじと思ふべき。

九 テルは、捕えられ、ついに命を取られるであらふか。

一〇 和蘭には、いなかの、あほく、と草のはへた小路のかわりに、緑色を湛えた運河が、畑から納屋、納屋から庭園というような工合に、それからそれえとつゞひています。

第六課 紀行文の要領

紀行文とは、旅行中の日記にして、叙事文の一種なり。其の記述することは、前課、日記文の處に述べたる事と、大様同一にして、日附、天氣模様、其の日の出來事、其の日の所感を、時の順序を追うて記すべきは、勿論なれど、日々異りたる土地を經過するものなれば、山川風俗の觀察にも差あるべく、快樂、苦痛の轉變もあるべし。其の他、記すべき材料豊富なれば、是等に就いても巧に叙述すべし。されど、材料の豊富なるだけ、記述すること散漫に流れ易ければ、よく其の特殊の點を認めて、枝葉にわたらず、成るべく簡明に、要を摘みて面白く書き、後日の思ひ出として、趣味多からしむべし。

文例

一 鎌倉日記

九日 朝とく起きぬ。七時頃八幡の宮に詣づ。宮居山によりていと高し。社務所をとぶらひて種々の寶物を見つ。珍らしきものども多かり。社前にいたくものふりたる銀杏の木あり。こは、公曉の身を潜めたるところとぞ。石階を下りて、左の方に神樂殿、若宮などあり。若宮は靜の舞ひし所なりといふ。これより、小袋坂を経て、建長寺にいたる。山靜に水清く、松高く苔なめらかにして、ものふりたるさま、げに名高き寺なりけり。

極樂寺坂を経て、稻村が崎にゆく。今日は風もなきた

れば、海上いと平かに、江の島など波のあなたに見ゆ。
それよりまた由比が濱を見めぐりて、もとの宿にかへりぬ。

十日 空曇る。宿をたち出でて辻町を過ぎゆくに、北條氏の館址、その外なにかしの館址、くれがしの館趾とて處々にあり。今は人の家居もいと少なく、田畑のみ多かり。滑川など見巡りて、右府の墓のある處にいたりぬ。めぐらしたる石垣もこぼれ、その地いたく荒れはて、見るかげもなし。かくて鎌倉宮に詣づ。宮の樣いと清らかなるに、拜殿などすがすがし。社の後の方に、宮を籠めまつりし土窟あり。社務所に案内を乞ひけるに、神主出て來て見せつ。拜み見るに、その中いと

暗くして、さだかに見えねど、かの土蜘蛛といふものにも、住みたるやうなるさまにて、常人の片時だに、住まゐるゝものにあらず。あたりを見巡るに、苔いと滑らかにして、今も血にそみたらんやうなり。そのかみを思ひまつるさへかしこしや。
(落合直文氏の文館略)

二 汽車日記

八月二十日 午前十一時過ぐる頃、新橋より汽車に乗りて出發す。折しも初秋の事なれば、品川、大森の海面、薄霧たち渡りて、安房、上總の山々も見えず。神奈川、程が谷などうち過ぎて、はやくも大船の停車場につきぬ。こゝは横須賀の方へも行くべき、追分なれば、上下する人、集散する車こゝに多かり。

足柄箱根は海道に名高き峻嶺なれど、今は居ながら、おりのぼりするなど、開けゆく世の賜にして、越えなやみし古人の紀行も、あらぬ虚言のやうなり。

沼津、富士川の邊、富士山高く、天半に懸り、浮島が原廣く横たはれり。松風は源平對陣の古を語るが如く、水聲は群鳥驚起の昔を答ふるに似たり。

興津の停車場にて、西よりの汽車を待てる程に、清見寺の鐘響き渡りて、日全く暮れたり。江尻の海岸をゆくに月出づ。漁火は月に光を奪はれて、遠く有渡の海に漂ひ、汽船は沖に烟を残して、近く清水の港に向ふ。むかし、足利時代に、雪舟とて畫を善くするものありけり。渡唐せし時、清江觀月の圖を描出して、かの國人の目を

おどろかし、が、爾後かの國人の、わが國に來遊するものは、必一度この地に杖をとゞめ、自國の瀟湘に比して、愛觀せりとかや。(佐々木高行氏の文節略)

○宿題

修學旅行の記

前課の要領及び文例にならひて作れ。

應用文題

- | | |
|--------------|--------|
| 一名勝遊覽の記 | 二遠足日記 |
| 三汽車の路 | 四船の旅 |
| 五海邊の一日 | 六山中の一夜 |
| 七地理理科にて學びたる事 | |

第七課 書取

左の文の文字を記憶し命に随つて書取れ。

一 質素とは虚飾の反對である。徒に上邊を飾つて、其の見えばかりをよくせぬことである。故に又質素は奢侈の反對、即、節儉であるといつてもよい。凡そ虚飾を好む人は、必、奢侈に走る人である。奢侈に走る人は、必、虚飾を好む人である。而して、質素主義の人は、必、奢侈に走る人でない。随つて、其の經濟に餘裕を生じ、道德の基礎もこゝに成立するのである。蓋、人として美を愛する心の、全くないものは、恐らくあるまい。男女を問はず、人は一般に美を愛して止まぬものである。例

へば、吾人が春は花を愛し、秋は月を愛し、或は時に山水の景色を眺めて、これを賞翫し、或は時に繪畫彫刻の類を見て、其の心を慰めるのは、畢竟美を愛するといふ觀念があるからである。

二 北京は、夏期日中、頗、暑く、寒暖計華氏百度以上に上るのとありと雖、夜半より拂曉にかけて、稍冷氣を感じず。或は雷雨一過、時に炎塵を洗ひ去るが如きこと少からず。冬期は寒冷甚しく、朔風沙塵を飛ばして、一天濛々たることありと雖、空氣乾燥して降雪多からず。一年の中、最爽快を覺ゆるは、秋期十月の頃なるべし。日光愛すべく、風意寒からず、夜間一天の月色、凜として光芒人を射、雁聲嗷々、頭上を掠めて過ぐるときは、人をして横槊

賦詩の情を起さしむ。

次の語句中、片假名の處に漢字を當てよ。

一色の種類あることサイゲンなし。

二カンバウの心地なりしが、病勢次第にツノる。

三全滅に近づきカンマンなるシャゲキをなす。

四カンニンは無事長久のモトキ。

五民情ジュンボク勤儉にして、戸にイウタウ、ブライの徒なし。

六農民をトクレイして、共同フザイをシャウクワンせしむ。

七デンアイ、タイセキして觀るにタヘズ。

八宮殿樓門シンシとして散列し、黄屋朱壁日光にエイジ

てサンランたり。

九我が國は古來モヤウのイシヤウに富む。

一〇セイエイなる艦隊をソシキして、万里のハタウをカウせんとす。

第八課 書翰文

弔慰文

弔慰文は、人の凶事を弔ひ慰むる文なれば、すべて懇切丁寧に、誠心より情をこむるは、祝賀に於けるも同様なれど、同情を深くする點に於ては、特に注意せざるべからず。而して不幸の際は、とかく、取り込み勝ちなるものゆゑ、文の冗長に

亘らざるやう、且修飾なく認むべし。既に見舞文の注意にも述べたる如く、眞情を表はす場合に、頻に景物を並べ、語句を練りて、文に修飾を加ふるは、徒に筆を弄びたる輕薄の心を見するに等しきを以て甚宜しからず。殊に先方に於ては、かゝる事に心を傾くる時にあらざれば、却て怒を招くことあるべし。よく／＼慎むべきことなり。且又、弔慰文にも從來の慣例によりて、起首、挨拶などの前文を省き、返し書きをなさず、墨色淡く認むるがよし。

文例

死去を吊ふ

御祖父様にはかに御死去遊ばされ候ひぬと承り、たゞ夢のやうなる心地のみいたされ候。常には世の人に

もまさりて、御健にあらせられつるを如何なる病に罹らせ給ひしにか。先日御庭の紅葉見に上りし頃、御機嫌うるはしう、復雪の頃にもなど、仰せられしが思ひ出されて、今一度の御目もじの叶はざりつるが、悔しさいはん方なく候を、まして、御許様の御心、いかにおはすらん。さりながら、これも宿世とおぼしめしかへさせられ、後の御營みの事、專、遊ばし候へ。此の線香一箇、取あへず御靈前へ手向け申し候。今夕、必、御通夜に参り候べし。あなかしこ。(作文教典改題)

文題

一母を喪ひたる友に
二兒を亡ひたる人に

三職務に殫れたる人の家族に
四友の兄の殉難を弔ふ

第三學期

第一課 傳記文

傳記文とは、敘事文の一種にして、人の經歷を述ぶる文なり。而して、經歷を敘述するには、一生を通じたるものと、其の或る部分に止まるものとあれど、何れにしても、よくその事實を正して正確に敘述し、恰もまのあたり其の人に接するか如く、人をして其の人物を景慕し、其の事業に感奮せしむるやう作らざるべからず。

さて、傳記文に記述すべき事項を擧ぐれば、

一 祖先、父母

一 生地、生年月
 一 氣質、體格
 一 幼時の境遇
 一 交遊
 一 事業、功績
 一 晩年の境遇
 一 没處、没年月、年齢
 一 逸事
 一 評論
 等の如しといへども、或は此の中三四を省き、或は僅に二三に止むるなど、悉く備はるを要せず。又、その順序に於ても、評論、逸事を起首にし、氣質、交遊を末尾にするなど、必しも一

定の順序を守るに及ばず。されど、固より叙事の文なれば、前にも屢述べたる如く、次第井然として、一事實中に於ける經歷の前後を亂れざらしむるは、勿論注意せざるべからざるなり。

文例

一 貝原益軒

貝原益軒、嘗、湊川を過ぎて、楠公の昔を追想し、公の事蹟を片石にしるして、永く後世に傳へむとて、兵庫の富商に謀りしに、大に賛しければ、碑文を撰びて與へたり。こゝに、富商はうち喜びて、石工にも謀りてありしに、益軒俄にその文稿をとりにおこせたり。文章の改刪にもやと、そを返しゝに、やがてまたいひ送りけるやう、余

思ふに、楠公の勳功、日月にもくらぶべきに、余の如き淺學の筆もて、碑文を記さむは僭越なれば、この事は思ひ止みね。 庵忽なることを約せし罪は許し給へ。」といふ。 益軒の篤實にして謙遜なりしこと、この一事を以て知らるべきなり。

益軒、姓は貝原、名は篤信、通稱を久兵衛といへり。 筑前の藩醫寛齋の子なり。 幼より群兒のなす遊を好まず。 ひとすら讀書を嗜みぬ。 中年に及びて京都に講學し、後、醫とならむ志を起せり。 はじめ、陸王二氏の説を喜びしが、後宋學に歸したり。 心術をもて後世に裨益せむと欲し、聊も名利に馳せず。 故を以つて、著書數百部、假字がきのもの多し。 その見識人の及ばざる所なり。

益軒子なし。 兄存齋の子を嗣となす。 正徳四年、享年八十五にして卒しぬ。

益軒、儒學の外に殖産興業の事にも志あつく、農耕、本草の著書も、また少からず。 詩をば無用の閑語なりとして、多く賦せざりしが、歌は折にふれて、詠み出でたり。 文章も、字を鍊り、句を修むるは儒者の文の主とするところにあらずとて、辭の達するを以て要とせり。 其の卒せむとする時の歌に、

來し方は、一夜ばかりの、心地して、

八十ぢあまりの、夢を見しかな。 (本朝傳記節略)

二野村望東

本姓は浦野氏、名はもと、福岡藩士浦野勝幸の三女なり。

大隈言道につきて和歌を學びぬ。年二十四、藩士野村新三郎の後妻となりしが、五十四の時夫を喪ひ、剃髮して望東と號せり。文久元年十一月、和宮降嫁の行列を拜せんとて京都に出て、翌年四月國に歸りしが、この時、高杉晋作等の如き諸志士の難を避けて來れるものを匿して、衣食を給しぬ。後、太宰府謫居の五卿に密謁せしによりて嫌疑を受け、慶應元年十月、姫島に流されたり。二年九月、同藩の浪士藤四郎親茂等、望東を奪ひて馬關に至り、後、三田尻に移しぬ。望東勤王の志厚く、諸志士の事業を援けたること甚多かりき。三年十一月十三日歿す。年六十二。

○宿題

自傳

前課の文例を參考し、左に掲げたる事項と順序とによりて文語體に作れ。

一 生地、生年月

二 幼時の境遇

三 學校の經歷

四 學科の好惡若くは巧拙

五 自評若くは希望

應用文題

讀本又は修身、歴史科にて學びたる人物

第二課 復文

左の文を平たき口語文に改めよ。

桃の嫩葉

女子は、我が家を出て、夫の家を家とし、我が父母を離れて、夫の父母を父母とするものにて、孝貞の二つこそ、婦道の第一なれ。孝とは、舅姑に事へて敬愛を盡くすをいひ、貞とは、夫に事へて節操を正しくするをいふ。孝子深愛の心あらば、必、和氣あり。和氣あらば、必、愉色あり。愉色あらば、必、婉容あり。舅姑をいとほしく大切に思ふ心深ければ、相對したる時、自然と氣和して、違ひ戻ることもなきものなり。其の氣和げば、自ら顔色もにこやかになり、顔

色にこやかなれば、自ら身の起居振舞もしとやかにして、能く物に順ひて逆ふことなきものなり。(桃の嫩葉節畧)

左の新體詩を普通なる文語體に改めよ。

一金剛石

皇后陛下

金剛石も磨かずば、玉の光はそはざらん。

人も學びて後にこそ、誠の徳はあらはるれ。

時計の針のたえまなく、めぐるが如く時のまも、

日影をしてみゝて勵みなば、いかなる業かならざらん。

二松の操

税所敦子

月の桂もたをるべし。言葉の花もかざすべし。

月のかつらは手折るとも、ことばの花はかざすとも、

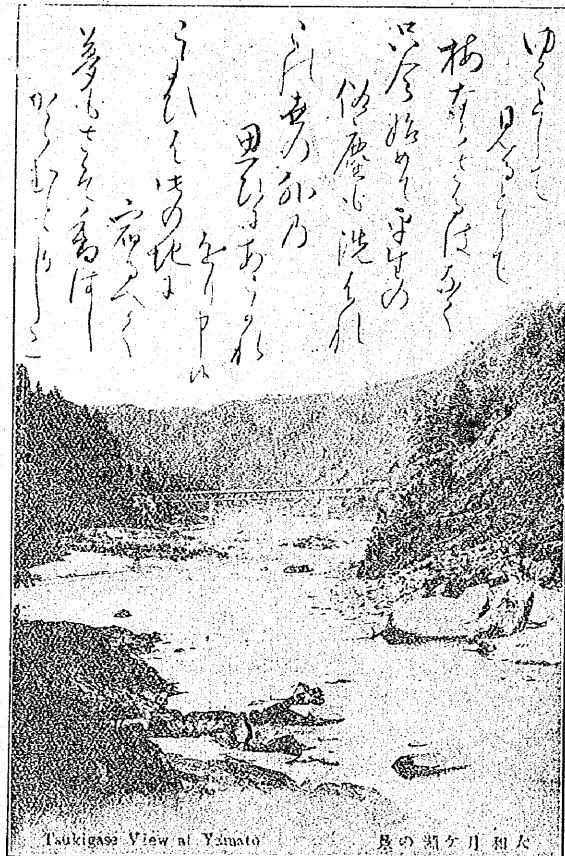
時雨に染まず降りつもる、雪にたわまぬ常盤木の、

松の操を守らずば、世に立つかひやなからまし。
 注意 意義を失はざる限り、語句、語脈の添削轉換を行ふを妨げず。

第三課 繪葉書文

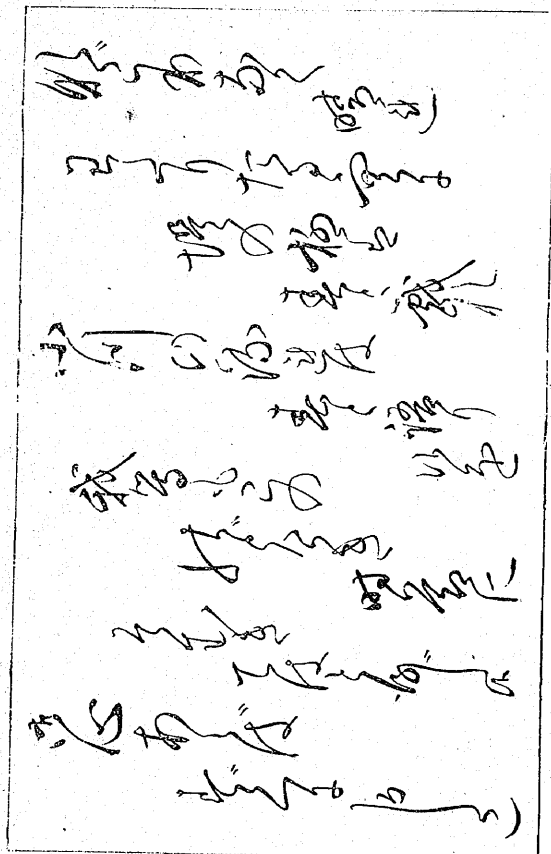
繪葉書文とは、繪葉書の繪の餘白に認むる文を指す。かゝる文は半、娛樂に供するものなれば景色にても、人事にても、口調面白く餘韻を湛へ、およそ、その繪の餘白をはかりて、書き得るだけに、簡潔なるをよしとす。

繪葉書の認め方に關する注意は、既に一學年に於て述べたるが、繪の餘白に認むる場合には、窮屈ならざるやう、適當なる行を隔つるか、又は散らし書にして、共に繪に一層の美觀を添ふるやう美はしく認むべし。



Tsukigasa View of Yatsuato

大和月ヶ湖の景



又、繪葉書にあらざれど、娛樂的に散らし書きにすることあり。此の際にも、文章、文字共に繪葉書同様の心得にて、縦或は横に、適當なる字配りにして、巧に認むる時は、優美にして愛すべきことをさく、繪葉書に劣らざるべし。

練習

一前に示せる繪葉書の文にならひ、各自用意せる繪葉書の繪に、適當なる文を作りて認めよ。

二左の文の返事を作りて、作文葉書に散らし書きにせよ。
 きのふ菫摘みに野に出てしに、よべの春雨に、はなびら涙にむせび、つい手折かね候まゝ、花ずきの君に贈らばやと寫生いたし候。香はなくとも春野の面影と見給はゞ、此の花もさぞな。かしこ。
 (女子葉書文範改作)

○宿題

- 一 各自の隨意なる繪葉書に其の繪に對する文を、口語體にて認めて出だせ。
- 二 一の返事を文語體にて綴り、作文葉書に、散し書きにして出だせ。

第四課 書取

次なる文を熟讀して、命あらば書取るべし。

一 古の世々のみかど、春の花のあした、秋の月の夜ごとに、はべらふ人々を召して、歌を上らしめ給ひ、さかし、おろかなりとしろしめしけんと、古今集の序にあるを、いか

なる事にかと、若きほどは、思ひたどりつるに、やうく、歌といふものゝ、まことの旨をさとるにつけて、げに、さることなん思ひ知りぬる。さるは、いにしへの歌は、をりにふれ事につけつゝ、心にうち思ふまゝを、作らずかざらず、いひ出だしゝからに、おのゝ其の生れつき、その心ばへの、おのづから音調のうへに顯はるゝこと、恰も物の形の鏡にうつる如くなれば、歌につきて、其人がらをしろしめしけんこと、うたがふべくもあらず。世くだりて、この道おとろへゆくまゝに、歌といふものを、一つの藝道のやうに思ひとりて、かの心を種とすることを忘れ、やゝもすれば、その趣向を人情の外にもとめ、ひたすら、織言綺語を連ねて、作り飾ることゝなりた

るより、歌としいへば、いたづらに、風流韵士のもてあそびものとなり、甚しきは書畫のたぐひと、ひとしなみに見らるゝに至れるは、歎きてもあまりある事なりかし。

二下田の近浦、妻良、甲良、大洲わたりの童子等、十四五歳以下、八九歳なるが、四五人を一隊として、漁舟をあやつり、らんぐひの如く、海中より出でたるいはほのあひだを、自在に漕ぎめぐらして、釣する有様、目をおどろかし、膽をひやさずといふことなし。かく、幼きより水練せては、生涯身を一葉にまかせんこと、いとなし難きわざなりかし。何れの年にかありけん。大洲より江戸へおしおくるとて、さゝえを積みたる舟、伊東が崎にて暴風にあひて、立ちどころにくつがへりけるを、かちとり八

人、各、海中に跳び入りて、舟を引きおこし、あまつさへ、波の底にしづみて、失せたるさゝえを、悉くひろひとり、舊の如く舟に積みのせて、其のいふぐれに、大江戸なる日本橋に漕ぎよせきとなん。

次なる語句中、傍線を施したる字に假名を附けよ。

一九重の櫻、朝日に匂ふ。

二己の功を推して人に譲る。

三井戸ばたの櫻あぶなし酒の酔。

四朝顔の咲くや親にもしかられず。

五其の氣和げば、起居振舞もしとやかにして、物に逆ふことなし。

六海人が呼び、聲、船人が棹の歌、すべて腸を洗ふ佳境なり。

七かく辛き目を見せ參らせて侍れば、やゝ徳川殿に
仰せられて、大政所の御恨をも晴らさせたまへ。

八一農耕さざれば、民これが爲に飢る者あり。一女織ら
ざれば、民これが爲に寒る者あり。

第五課 記事文

左の文に、先、句讀を切り、然る後、その文意を縮めて短文とせよ。

石炭

我等が利用する天然物の中にてその最要用なるものは

何なるかと問はゞ何人も先指を石炭に屈するなるべし
今かりにこの石炭をば姑我等の手中より取去られたり
としてその結果を想像せば我等の産業社會はそこにい
かなる落莫の觀を呈すべきぞすべての蒸氣機關は殆ど
その運轉をとどめ交通の最大機關たる陸の鐵道水の汽
船も活動せずこの新世紀の文明はまさにその一半の光
輝を失ふに至らむあゝ何人かかゝるいまはしき想像に
堪ふるものぞ

英國の工業は世界の最隆盛なるものと稱せらるその然
る所以のものは主として英國が石炭の産出に富めるに
よれりといへり嘗世界の海國と稱せられて領土全地球
にあまねかりし彼のスペイン國は限りなき多額の金銀

をばその新書士より齎し歸りて頻にその富に誇りたりきされどその結果は如何美しき貴金屬の光に眩目しその富に心酔したるこの國民は相率ゐて皆遊蕩懶惰の風に陥りて國勢は遂に衰へぬ英國はこれに反してその産出する多額の石炭を利用して頻にその工業を勵み遂によく今日の富を致すに至れりかくて彼等は常に我等の石炭はよく貴き金銀にうち勝てりといふとか思へば工業社界の人々がこれを賞揚して黒き金剛石と呼ぶもの決して偶然にあらざるなり (中等國語讀本節略)

注意 長文を短縮せんには、先、その文を熟讀して十分に主意のある所を知り、これに附隨する例證、比喩、及びこれが補助たる語句等を省略するにあり。而して場合によりては、段落の離合、語句の轉換をなすも

妨げなし。されど、省略を誤りて、要點を取り落し、或は語句の斷續ふろしきを得ざれば、拙劣不明の文となるを以て、よく注意せざるべからず。左に短縮の一例を示さん。

會社

會社とは、多數の人の働きと、資本とを集合して、生産、交換に従事する團體なり。一本の矢は折り易きも、數本の矢を束ねたるものは、折り難きが如く、一人の働きや、資本にては、到底大事業を營むこと叶はざるが故に、多數の人の働きと、資本とを結合して、事業を營むこと行はるゝに至りしものなり。今日の社會にては、農業にまれ、製造工業にまれ、商業にまれ、運搬にまれ、銀行業にまれ、會社組織によりて營まれざる

1C230.8

もの殆どなし。

この文を省略して短くすれば左の如くなるべし。

會社とは、多數の人の働きと、資本とを集合して、生産交換に従事する團體なり。是れ單獨にては、到底大事業を営むこと能はざるを以て、かゝる事の行はるゝに至りしなり。故に、今日實業の大なるものは、大抵この組織によりて営まれざるものなし。

應用文題

讀本中の文章の短縮又は改作

應用女子作文書卷三終

明治四十四年一月廿八日印刷
明治四十四年二月二日發行

定價	
卷一	金貳拾五錢
卷二	金貳拾五錢
卷三	金貳拾五錢
卷四	金參拾五錢

編者 三松堂編輯所

發行者 松邑孫吉
東京市京橋區南鍛冶町一番地

印刷者 青木弘
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地



(應用女子作文書)

發兌元

東京市京橋區南鍛冶町
振替口座七九三四番

松邑三松堂

◎ 書 良 の 讀 必 君 諸 生 學 校 學 女 等 高 ◎

- 前東京高等師範學校教諭 小山左文二先生著
新 國 語 漢 文 辭 林 全一冊 特價壹圓五拾錢
 小包稅拾貳錢
- 重野文學博士 小杉文博士序
 奈良女子高等師範學校教授 須藤求馬先生著
日 本 女 史 全一冊 定價壹圓四拾錢
 郵稅拾四錢
- 女子高等師範學校教授 黒田定治先生校閱
 廣島高等師範學校教授 長谷川乙彦先生著
新 女 子 用 教 育 學 全一冊 定價五拾五錢
 郵稅八錢
- 東京高等師範學校教授 吉田彌平先生著
 東京高等師範學校教諭 小山左文二先生著
三 國 文 典 教 科 書 全四冊 郵定稅價拾壹錢圓
- 東京高等師範學校教授 吉田彌平先生著
 東京高等師範學校教諭 小山左文二先生著
假 名 遣 教 科 書 全一冊 定價貳拾錢
 郵稅四錢

★ 東 京 京 橋 松 三 邑 堂 振 七 替 九 口 三 座 四 ★

◎ 書 良 の 讀 必 君 諸 生 學 校 學 女 等 高 ◎

- 東京美術學校教授 福井江亭先生題詞
 伊藤龍涯先生編寫
寫 生 の 仕 方 全一冊 定價卅五錢
 郵稅四錢
- 前東京高等師範學校教諭 小山左文二先生著
 東京府第三高等女學校教諭 西脇吳石先生書
高 等 女 新 撰 習 字 帖 全四冊 定價八拾錢
 郵稅八錢
- 前東京高等師範學校教諭 小山左文二先生著
 東京府第三高等女學校教諭 西脇吳石先生書
補 習 女 子 習 字 帖 全一冊 定價廿五錢
 郵稅四錢
- 東京府青山師範學校教諭 西脇吳石先生編書 (書法說明附)
三 體 千 字 文 全一冊 定價四拾五錢
 郵稅六錢
- 前東京高等師範學校教諭 小山左文二先生著
 東京府第三高等女學校教諭 西脇吳石先生書
習 字 範 用 書 全一冊 定價三拾錢
 郵稅四錢

★ 東 京 京 橋 松 三 邑 堂 振 七 替 九 口 三 座 四 ★

461

東南 京鍛 京冶 橋町 松 邑 三 松 堂 振七 替九 口三 座四

